

ちクシャン語ともまた同體異名であるべき筈である。従つてトクハラ語はまたクシャン語であるべき筈である。然るに次に述べるやうにムルツク出土のトルコ語の十業佛譬論鬘の奥書^⑭にはこの經を Kuisan (Küsan) の語からトクハラ語に譯し、トクハラ語からトルコ語に譯したと記され、そうしてこゝにいふ Kuisan (Küsan) をミユラー氏 (F. W. K. Müller) が貴霜に當てたのに對して誰も反對の意見を唱へたものはないのである。この見解を取る人々は前記のトクハラ語はまたクシャン語でなければならぬといふ論理上の歸著との間に、適當なる解釋を加へねばならぬ筈である。

前にも斷つて置いたやうに、この *utisi* を月氏に當て、トクハラ語を月氏語と見るのは主として獨逸の學者の間に行はれて居る考で、これに對する異論がないのではない。例へばステン・コノウ (Sten Konow) 氏^⑮の如きはその一人で、この人は主として南道に行はれた于闐語^{クホータン}が即ち月氏語、少くとも貴霜語と見るべきものであることを主張してゐる。

最後に新疆出土のトルコ語佛典中に見える Kuisan (Küsan) を前に述べたミユラー氏の見解の如く貴霜に相當するものとし、貴霜語の佛典をトクハラ語に譯し、更にこのトクハラ語の佛典をトルコ語に譯したと見るのが果して妥當であるか否かについても、また極めて大體を論述して置きたい。ミユラー氏がこの語をかく Kuisan とか Küsan とか更にまた Kuisan とか Küsan とか種々の読み方をしてゐるのは、その文字所謂ウイグル文字では E. とロ. とが同形で読み分け難く、s と s 即ち sh と s とも字形が甚だ近く、同一語でも或時は s の字形を用ゐられた